神経症的な父、身体障害の母、鬱的な娘の3人家族へのかかわりを考える

事例提出者

Fさん（行政保健婦）

提出理由

これまで、母(Mさん)には役所の保健婦（事例提出者）が、娘(Kさん)には保健所の保健婦が主にかかわってきた。今回、父（S氏）からの依頼で事例提出者が娘にかかわる機会をもった。しかし、自分のかかわり方でよかったのだろうかという反省の気持ちが出てきた。皆さんに検討していただき、これまでの援助の検証と今後のかかわり方を考えてみたい。

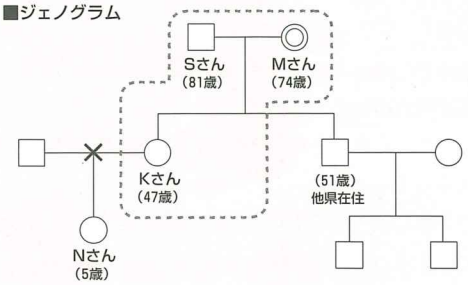
プロフィール

S・81歳、M・74歳、K・47歳

S氏：数年前に白内障の手術をしたことがある。しかし、身体は健康で、家事と妻（Mさん）の介護をしている。「行動計画通りに事を運ぶ」という生活スタイルをもっている。

Mさん：平成7年に脳出血（右半身麻痺）。病気のせいなのか、性格なのか、夫にうながされて病院受診と歩行訓練をする以外は、終日椅子に座ってテレビを見ているのみ。訪問すると、いつもへらへらしている。娘のことについてもあまり語らない。要介護2。

■ジェノグラム



援助経過

平成7年6月

S氏より電話。「Kが産後のノイローゼで育児ができないようだ。嫁ぎ先の姑が厳しいため、Kに連絡するのが難しい。Mが要介護状態なので手がかかり、様子を見に行ってやれない。何とかならないか」

→Kさんの嫁ぎ先は近隣ではあるが、他市町村のため、自分で訪問することはできない。そこで、管轄する保健所の保健婦に訪問を依頼。後日、「Kさんは鬱病のため入院となった。医師か

スーパーヴァイザー・奥川幸子氏を招いて開かれた事例検討会の模様を紹介します。（検討会及び事例の内容は、誌面の都合及びプライバシー保護の観点から、全体の趣旨に差し支えのない範囲で変更させていただきました）

らKさんの夫に入院について説明があった。協力的な夫である」という連絡が入る。

平成９年10月

S氏より電話。「Kの夫が『雨降りなのにKは布団を取り入れもせず、家事もしない』と電話で苦情を言ってくる。鬱状態になっているのではないかと不安だが、連絡がとれない」

→保健所の保健婦に連絡し、主治医への連絡等を依頼。

平成９年11月

S氏が来庁。「法事のため帰省したKが『婚家に帰りたくない』という。孫の予防接種が必要だが、『接種に行ったら連れ戻されるかも』と心配している。こちらで受けられないか」

→予防接種についてのアドバイスをする。しばらくして、「謝って婚家に帰った」とS氏より連絡が入る。

平成10年２月

S氏より電話。「孫を姑に取り上げられ、Kのみが帰された。Kの夫は姑の味方をするばかりで、Kの気持ちをわかってくれない。保健婦が訪問して『母親の育児が大切』と言ってはもらえないか」

→保健所の保健婦に連絡。乳児訪問を実施してもらう。

それ以降、Kさんは実家で暮らし、婚家にいる子どもには週１回しか会いに行くことが許されなくなった。事例提出者にはS氏から何度か連絡があり、Kさんが無口になってきたこと、婚家の対応がひどいことなどを愚痴り、「何とか言ってほしい」と繰り返す。事例提出者が家庭訪問をすると、Kさんは口数は少ないが穏やかな表情で傍らに座って話を聞いたり、お茶を入れたり、帰りには玄関まで送ってくれる。S氏が別居の件について事例提出者に愚痴るのを聞き、Kさんは「お父さん。そんなこと言わなくても……」とS氏を制する。

平成10年11月

訪問中、S氏が嘆く。「平成９年頃から白内障が悪化し、手術した。その後の経過が思わしくない。実はKは再婚で、最初の夫は暴力がひどくてすぐに連れて帰った。今の夫とは、本人が

嫌がるのを知人が強引に結婚を勧めた。なのに、その人は今の状況を解決するために動いてくれない」

平成11年１月

Ｋさんは夫から一方的に離婚の意思を告げられる。食欲が落ち、声も出なくなって、点滴を受けに通院したこともあったらしい。Ｓ氏は「たとえ離婚になっても、孫は手放したくない」とあらゆる機関（社会福祉協議会の「法律相談」、民生委員の「心配ごと相談」、保健所の「精神衛生相談」等）に相談に行くようになる。また、「Ｋがちっとも喋らない。家事だけしておいて自分の部屋からも出てこない。家が暗いし、僕は大変です。何とかしてほしい」と再三事例提出者に連絡をしてくる。その都度、「保健婦は、家庭のなかの事情をどうこうできる立場ではない。息子さんにも相談するなどしてみたらどうか」と話す。

平成11年３月

Ｓ氏より電話。「Ｋが喋らないため、家庭が暗くなった。僕は家事も妻の介護もしなければいけないし、心身ともに疲れた。Ｋが病院受診をしなくなったので、受診を勧めてほしい」

事例提出者は、「お父さんも大変だが、今いちばん辛いのはＫさんではないのか。気持ちを察してあげてほしい」と言い、訪問を約束した。

翌々日、訪問

Ｓ氏が保健婦の来訪を告げ、Ｋさんに自室から出てくるよう言うが、反応はない。少し時間をおいてＫさんは姿を現すが、すぐ別室に行こうとする。その時、事例提出者はＫさんに近づき、Ｋさんだけに聞こえるように小声で「お父さんがうるさいんじゃないですか？」と聞いてみると、「えっ!?」と、少し表情が和らいだように見えたが、それ以外の言葉はなかった。

その後も、相変わらずＳ氏は役所に来たり、電話をかけてきて、Ｋさんが喋らないこと、家事をする以外は自室にこもっていること、自分がしんどいことを嘆く。

平成12年２月

Ｍさんの健康チェック目的で訪問。Ｋさんが事例提出者にお茶を出す。Ｍさんとの面接が終了するのを待っていたかのように、自分のほうから、①夫から離婚話が出ていること、②夫には「代理妻」がいること、③娘に会わせてもらえないこと、について話し出す。「娘さんと会えないのは寂しいですね」と応える。

その後も相変わらずＳ氏からの相談は頻回にある。事例提出者と保健所の保健婦が随時訪問。Ｓ氏は「自分のほうがおかしくなりそうだ。娘に何か言ってくれ」と訴える。

平成12年秋

Ｋさんは昼頃起床して朝食をとる。夕食の準備はするらしいが、一日のほとんどを自室で過ごす。

平成13年２月

家庭裁判所から離婚調停の通知がある。それ以降、Kさんは自室から出てこなくなる。

平成13年4月

S氏来庁。「Kが自室から出てこないし、食事をしない。孫が父方の伯母に連れられてKに会いにきたが、痩せて顔つきが変わっているものだから『怖い』といって寄りつかなかった。自分はもうへとへと。Kを（精神科に）入院させたい。送迎を頼む。Mが救急車で運ばれるし、もう大変です。僕のほうがつらくてしょうがない」等々。

→自分の立場でしか語らないS氏に腹が立つ。Kさんの兄はどう考え、何をしてあげたのか疑問に思う。「食事ができないというが、Kさんの体調はどうなのか。娘の気持ちを考えてあげたことはあるのか！　息子（Kさんの兄）には相談しているのか！」と厳しい口調で言ってしまう。また、Mさんの状況について、「再発作なのか、別の病気なのか」を問うが、要領を得ない。いくら話をしても堂々巡りなので家庭訪問をする。

訪問すると、Mさんはベッドに臥床している。一昨日、椅子からずり落ちて腰を打ち、救急車で搬送されたらしい。骨に異常はないが、腰痛があることと、元来の動きたくない性格（？）のためベッドでじーっとしている。保健婦を見ると、「あははっ」と笑う。

Kは激しく痩せており、顔つきも見間違うほど変わっている。表情も暗く、眉間にしわを寄せて、こちらと目を合わせようともしない。

→Kさんが避けようとするので、腕をつかんで話しかける。①食事をしないと聞き、体調が心配で訪問した、②身体に異常がないかどうか検査のために受診してほしい、③慰労の言葉等々。延々1時間近く一方的に話しかける（話をするうちに涙が出てきた）。無表情だった顔に変化が見える。つらそうな顔に見えた。

その後、声を出す元気さえないのではないかと心配になり、「一声だけ聞いたら帰ります」と言うと、「モニョモニョ……」と声を出してくれる。「声が聞けてちょっと安心しました」とKさんの手を離す。Kさんが自室に戻ろうとして振り返ったとき、「また顔を見にきてもいいですか？」と聞くと、Kさんはうなずく。

数日後、KさんはS氏に伴われて精神科を受

診。食事をしないことによる栄養剤の点滴治療は必要だったものの、S氏が心配していた精神疾患による入院は不要とのことで帰宅する。

その後も、相変わらずKさんは自室にこもってはいるものの、S氏からの訴えはなくなった。

振り返り

S氏の訴えがうっとうしくなり、Kさんに同情的になっていた。今振り返ると、Kさんばかりでなく、S氏やMさんの立場でものを見る視点が必要だったのではないかと思える。

Kさんの思いを聞いたことがあったが、要領を得ない感じがして、それ以降尋ねてみなかった。ゆったりと時間をとって聞いてみてもよかったのではないか。深くかかわるタイミングがあったのではないかと感じている。

ケース検討会

奥川　Fさんがこのケースを提出したのはどうしてですか。

Fさん　13年の4月に私がきつく言ってから、Sさんからの訴えは少なくなっているのですが、改めて振り返ってみると、6年もかかわってきたのに、結局自分は何もしてさしあげられなかったのではないか、という思いがあります。

奥川　では、今日はどんな点に焦点を当てましょうか。

Fさん　これから、このご家族にどうやってかかわっていけばいいのかという点について検討していただきたいと思います。

奥川　それでは、まずはこのご家族とFさんがどんな状況にあったのか。情報を共有するために、Fさんに質問をしてください。

発言　お兄さんが一人いらっしゃるということですが、どちらにお住まいなのですか。

Fさん　比較的近県ではありますが、電車で5～6時間くらいかかるところです。

発言　息子さんとSさんの親子関係はどうなのでしょう。

Fさん　1年に1回帰省するかどうかで、ふだんはほとんど連絡をとっていないようです。

発言　SさんはKさんのことを息子さんに相談したりはしないのでしょうか。

Fさん　話したことはあるようですが、「離婚のことなどは周りの人間が首を突っ込む話ではない。放っておけばいいんだ」というようなことを言われたようです。

発言　Sさんのもともとの仕事はわかりますか。

Fさん　そのあたりは聞いていません。

発言　経済状況はいかがでしょう。

Fさん　年金で暮らしていらっしゃいますが、困っているという状況ではありません。Sさんは「貯蓄はあります」とおっしゃっています。

発言　お母さんのMさんは、何かサービスは利用していないのですか。

Fさん　ヘルパーの入浴介助を受けています。

発言　通院の介助は誰がしているのですか。

Fさん　Sさんがしています。週に3回、リハビリと外科と内科に行き、そのほかに週2回、マッサージに通っています。

発言　すべてSさんが送っているのですか。

Fさん　はい、車で。家でも、炊事、洗濯等、すべてSさんがしていらっしゃいます。

発言　それはMさんが病気になる前からですか。

Fさん　病気になる前は、Mさんがしていたようです。でも、今は洗濯物たたみのようなMさんができることでも、Sさんが全部してしまうので、Mさんはテレビを見ている以外、ほとんど何もしていません。

発言　Sさんが白内障の手術をしたときは、Mさんはどうされていたのですか。

Fさん　同じ病院に入院していました。

発言　KさんとSさんのこれまでの親子関係はどうだったのでしょう。

奥川　大事な質問です。

Fさん　そういう情報は聞けていません。

発言　Kさんの嫁ぎ先は近いのですか。

Fさん　車で2時間くらいのところです。

発言　Kさんの最終学歴はわかりますか。

Fさん　わかりません。

奥川　なぜ、学歴を聞いたのですか。

発言　もし、Kさんの症状が自閉症からくるものだとしたら、子どもの頃からあったのではないかと思ったのでお聞きしました。

Fさん　子どもの頃のお話もほとんど聞いたことはありません。

対人援助職のスタンディング・ポイントとは

発言　FさんはMさんの健康チェックなどで訪問しているわけですが、Sさんはずっと娘さんのことしか話をしないのですか。

Fさん　そうです。

奥川　ということは、Sさんにとって奥さんのMさんはどういう存在ですか。

Fさん　介護をするにしても何にしても、全然苦になっていない。

奥川　そうですね。週に5日も病院やマッサージに連れて行き、家でも炊事、洗濯をしている。

Fさん　はい。

奥川　つまり、このご夫婦は二人で完結しているわけですよね。Mさんのケアニーズは、入浴などを除いてSさんがカバーできている。だから、SさんはMさんのことは何も言わず、娘についての訴えばかりしている。

ここで問われるのが、Fさんのスタンディング・ポイントなんです。この点について少しディスカッションしてみてください。

発言　平成12年2月の訪問の時に、Kさんがい

ろいろとお話しされていますが、これは自分から話をされたのですか。

Fさん　そうです。お茶をもって入ってこられて、横に座ったなぁと思ったらいきなりお話を始めたんです。初めてのことだったので、ちょっとびっくりしました。

発言　もし、FさんがKさんにもかかわるつもりで腹をくくっていたとしたら、Kさんが自分から話をしてこられたこの時に、「来た！」という感じで深く入って行けたんじゃないかと思いました。

奥川　Kさんを自分の担当ケースと思っていたかどうかですね。

Fさん　そうは思っていませんでした。頭のどこかでKさんは保健所の保健婦さんの担当ケースだと決めていたような気がします。この時も「それは寂しいですね」としか返せていませんでした。

発言　お父さんはFさんに娘さんのことばかり話しているんですよね。お父さんにすれば、役所も保健所も一緒なのではないでしょうか。いちばん身近な人だと思って、Fさんに訴え続けていたような気がするのですが。

発言　Mさんにはケアマネジャーはいないのですか。

Fさん　いるにはいるのですが、あまり動きがよくないので、結局私の所に情報がすべて集まるかたちになっているのです。

奥川　クライアントにすれば、専門職の役割や機能分担などは関係ありませんからね。この場面は、クライアントから自分が担当する問題ではないと思われる内容の話をもちかけられた時に、対人援助のプロとして、どうインテーク機能を果たすかということですね。

Fさん　私のなかでは、精神のケースだろうが難病の問題だろうが、依頼があればまず動くのが役所の保健婦の仕事だという自覚はあります。

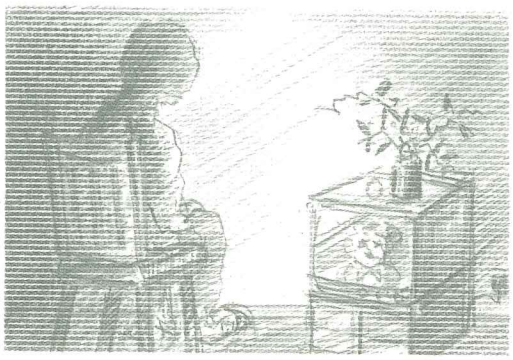
奥川　それが基本ですよね。

Fさん　はい。

奥川　でも、このケースでは、SさんがKさんのことを訴え続けていたのに、なぜかシャッターを下ろしていましたね。

Fさん　はい……。

奥川　要は、Mさんを担当する保健婦として、Sさんの悩みをどう位置づけるかということです。自分はMさんの担当ではあるけれども、その介護者であるSさんに大きな悩みが生じているわけですよね。奥さんの介護をしているし、娘さんの問題解決については動けないというジレンマを抱えている。こういう状況に対して、援助職としてどう対応するのかということなんです。



Fさん　Mさんの介護を続けてもらおうと思ったら、直接Mさんには関係なくても、Sさんの悩みを何とかしてあげないといけない……。

奥川　そう。Sさんを支えることはMさんに対する間接的な支援になるわけです。

Fさん　はい。

奥川　ただ、Kさんの問題に関しては、全部自分で対応するのではなく、保健所の保健婦さんや精神科医などの他の専門職に委ねる部分もありますよね。そう見極めながら対応するのが、スタンディング・ポイントです。

Fさん　よくわかりました。

一家にどうかかわるか

奥川　では、このあたりで今日のテーマに入りましょう。これからSさんたちにどうかかわっていけばいいのか。それでいいですか、Fさん。

Fさん　はい。何度訪問しても、Sさんは同じことばかり繰り返し言ってこられるのです。

奥川　さあ、なぜSさんは繰り返し繰り返しFさんにKさんのことを訴えてくるのでしょう。

発言　その問題が解決していないからじゃないでしょうか。解決しない限り、ずっと言い続けてこられるような気がします。

Fさん　私もそう思います。

奥川　では、なぜSさんは自分で解決できないのですか。

発言　これまでの生活のなかでぶつかったことのない問題だからではないでしょうか。

奥川　そう。Kさんの問題に対する対処能力をSさんはもっていないということですね。娘を心配する気持ちはあっても、どうしていいかわからないからオロオロしているわけでしょう。

Fさん　はい。

奥川　じゃあ、なぜSさんは娘のことには対応できないのか。それを解明するためにも、SさんとKさん親子がもともとどういう関係だったのか、理解し合えていたのかどうか、Sさんはどんな仕事をしていた人物なのかといった情報が重要になるのです。

Fさん　なるほど。いま腑に落ちました。

奥川　では、Fさんはこれからどうやってさん親子にかかわっていけばいいでしょうか。皆さん、いかがですか。

発言　まず、Sさんのニーズを出す必要があるのではないでしょうか。

奥川　大事な点ですね。Kさんの状態が悪くなるまでは、Mさんを支えるSさんがいて、Kさんは家族の一員に過ぎなかった。ところが、いろいろなことがあってKさんは部屋に閉じこもるようになり、Sさんにすれば、支えなければいけない人がもう一人増えてしまったわけです。SさんにMさんとKさんの二人を支える力があるのかどうか。これはどうでしょう。

発言　もう80歳を超えていますし、難しいのではないでしょうか。

奥川　そうですね。臨界点を超えてしまっているでしょうね。つまり、SさんはMさんの介護者ではあるけれど、Sさん自身も援助を必要としている人なのです。Fさんはこれまで、Sさ

んを「Mさんの介護者＝社会資源としての家族」としか見ていなかったから、つい批判的な気持ちが芽生えてしまったのではないですか。

Fさん　はい、その通りだと思います。Sさんに対する見方を変えなければいけませんね。

奥川　そうですね。

Fさん　そういえば、最後に訪問したとき、「何をおっしゃったのかわからなかったけど、Kさんが一言話してくれましたよ」とSさんに言ったら、とても嬉しそうにされていました。

奥川　いいですね。

Fさん　私がもっと積極的にKさんにかかわっていけば、Sさんのニーズも満たされるのでしょうか。

奥川　それも一つの方策ですね。ほかにはどうでしょう。

発言　Kさん自身の生きる力がどれくらいあるのか、お医者さんなどにもきっちり診てもらう必要があるとは思いますが、もしかしたら一人で暮らしたほうがいい状態になるかもしれないと思いました。

奥川　新しいアイデアが出てきましたね。そのためには、何を見なければいけませんか。

発言　経済的に実現可能なのかどうか。

奥川　そうですね。Kさんがひとり暮らしをするだけの経済的余裕があるのかどうかを見る必要があります。漠然と「困ってはいない」というだけではなく。

Fさん　そうやって情報が結びつくんですね。よくわかりました。

奥川　ほかにはどうでしょう。

Fさん　先ほど事例を報告していて、自分で気づいたのですが、私はMさんのKさんに対する思いを全然聞いていませんでした。

奥川　Sさんの訴えがうっとうしいとしか思っていませんでしたからね（笑）。

Fさん　はい（苦笑）。

奥川　でも、大事なところに気づきましたね。それと、Mさんがいつもへらへらしているというのが病気からくるものなのか、それとも性格的なものなのか、あるいは夫とのこれまでの関係のなかでできあがってきたものなのか、そのあたりも見ていく必要がありますよ。

Fさん　はい。

発言　お兄さんの存在は考えなくてもいいでしょうか。

奥川　それも大事ですね。Sさんは元気とはいえ80歳を超えていらっしゃいます。もし倒れてしまったりしたら、お兄さんが出てこざるをえません。そうしたことを考えても、やはり家族の関係性の歴史を押えておくことが大切になります。

Fさん、いかがですか。

Fさん　ありがとうございました。今日、ここで検討していただいたおかげで、Sさんに対して抱いていた憤りのような気持ちが失せていきました。今でもMさんの担当保健婦であることには変わりありませんので、これからはこのご家族全体をクライアントと考えて、きちんとかかわっていきたいと思います。